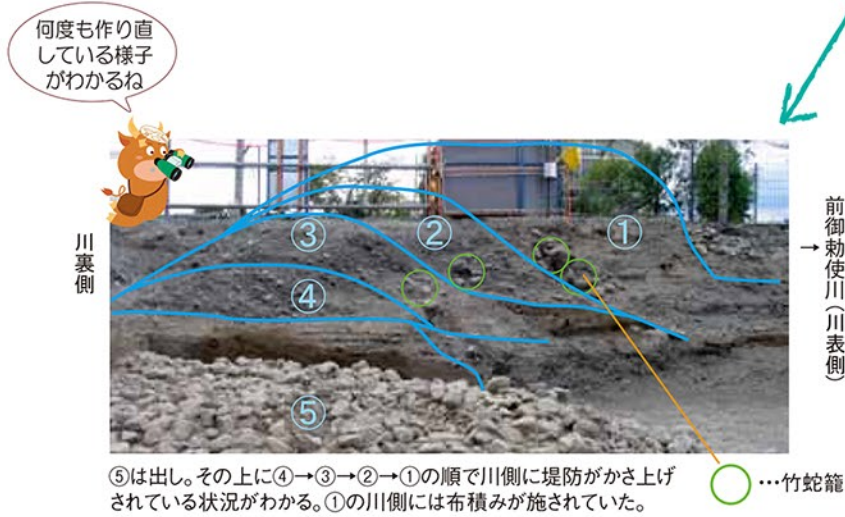
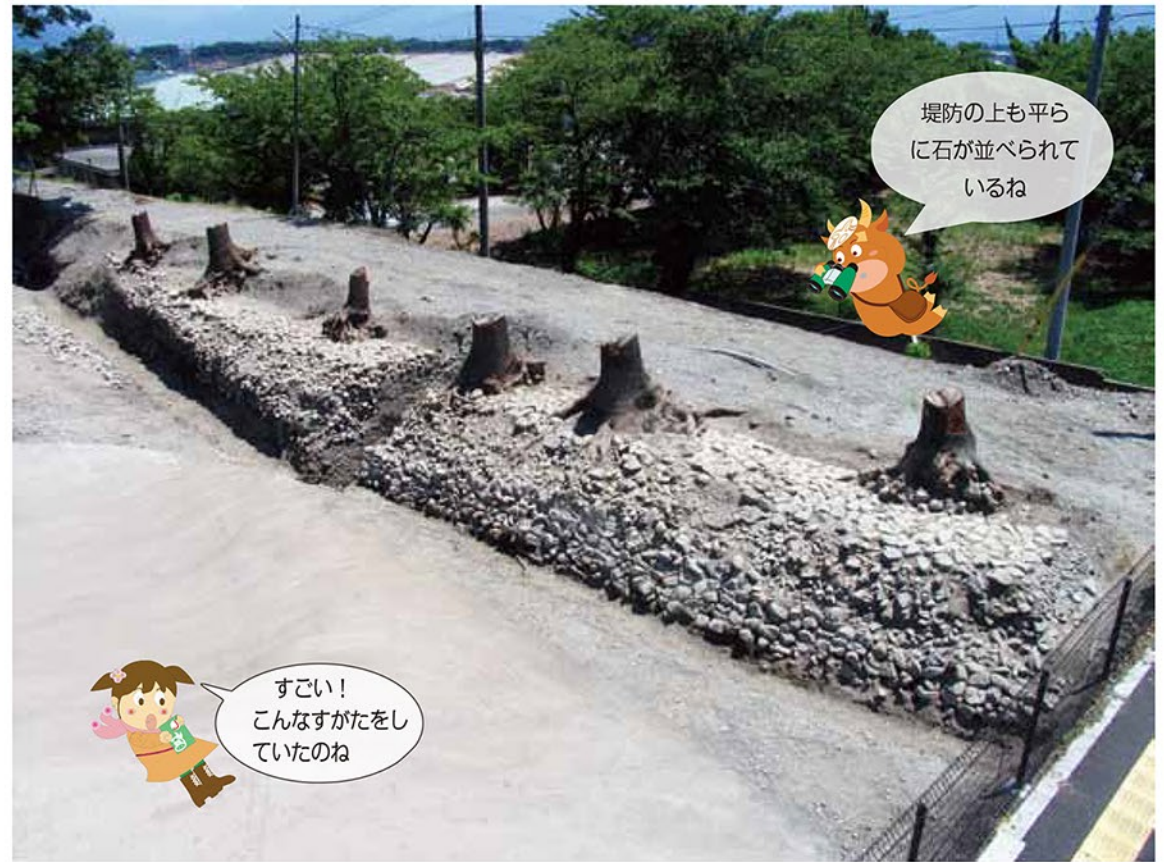


天井川のできるしくみ



⑤は出し。その上に④→③→②→①の順で川側に堤防がかさ上げされている状況がわかる。①の川側には布積みが施されていた。



まぼろしの前御勅使川堤防
お熊野堤発掘調査最新レポート

お熊野堤
(おくまんどうり)



野牛島にある旧運転免許センター南側の土手は、明治31年まで流れていた前御勅使川の右岸を守る堤防跡です。古くは「お熊野堤」と呼ばれていました。今回の調査は、お熊野堤の保護を第一の目的とし、市道建設のため必要最低限の掘削がなされる範囲を発掘しています。現在までの調査の結果、次のようなお熊野堤の構造が明らかとなりました。堤の形状は砂礫を積み上げたかまぼこ状で、水流の当たる川表側には長径10〜25cmの大小の石を積み、さらにその外側に長径25cm前後の河原石を積んでいました。この外側の石積みは、布積みという横に目地が通るように整然と石を積み上げる方法で作られ、堤防の馬踏と呼ばれる上部まで続いていました。馬踏の部分は、石がほぼ平らに敷かれていました。布積みされた石積みの堤防というのは、これまで発掘調査が行われた御勅使川の堤防、石積出や将棋頭、樹形堤防などでは発見されていません。つまり、御勅使川の堤防の歴史に新しい一頁が加わったこととなります。

今回見つけた堤防の築堤時期は、現在調査中のため調査結果を待って検討していきます。しかし、明治29年に起きた前御勅使川の大洪水の被害状況図に、今回の調査地点が記録されていないことから、

採用され、治水と農業の復興に役立っています。これまでの調査結果をまとめると、お熊野堤は砂や石を積み上げた堤防で、最も古い時代には石出しを設けていました。その後砂や石でかさ上げされ、水流が当たる堤防の法尻には竹蛇籠が設置されました。そして、前御勅使川が川としての歴史に幕を閉じる明治31年の段階では、先月号で紹介したように堤防の外側に布積みされた石積みの堤防となっていたのです。

今回の発掘調査では、堤防のすべてを発掘したわけではないので、まだ下にさらに古い堤防がある可能性がありますと考えています。少なくとも5回にわたって積み上げられてきた堤防の姿は、洪水と戦い安全な暮らしを求めてきた先人たちの努力を映しだしています。またそこで培われた技術は時と場所を超え、現在のさまざまな人々の暮らしを支えているのです。